

第 25 回日本産婦人科・新生児血液学会学術集会 会長挨拶

若手研究者による産婦人科・新生児血液学の発展に向けて
-血液疾患・病態への理解と出血・血栓症死亡ゼロを目指して-

総合母子保健センター愛育病院 副院長・産婦人科部長 安達知子

日本産婦人科・新生児血液学会は、15年間の研究会の期間を経て、学会として25周年を迎え、四半世紀が過ぎようとしています。この間、時代の経過と共に、血液疾患・大出血などの病態から血栓塞栓症が注目されることになり、本学会の行動がきっかけとなって、産婦人科の血栓塞栓症の予防ガイドラインが作られました。このリスク因子や予防法の周知と普及により、産婦人科血栓塞栓症の発症は著明に減少し、妊産婦死亡の減少に貢献してきました。一方、血液凝固・線溶系は今でも本学会の重要なテーマですが、液相系から血管内皮や胎盤絨毛という固相系での機序がクローズアップされました。また、結合タンパク、co-factorや受容体の問題のみならず、インヒビターの存在も注目され、分子生物学、遺伝子学の発展から、DNAレベルでの解析が発展し、研究領域が広がっています。血液は生命の発生、維持のみならず、母から子へと受け継がれるまさに神秘としか言えない物質であり、あらゆる人の健康、あらゆる分野での疾患や研究に大きくかかわるものです。

一方、いまだ妊産婦死亡の主要原因である大出血と血栓塞栓症は、もはや産婦人科医のみが関与し治療するものではなく、診断、治療、予防、管理において、放射線診断医・治療医、輸血・血液内科医、心臓血管外科医、麻酔科医、コメディカルとの集学的なチーム医療が必要な疾患となっています。

今回は、とくに日本麻酔科学会、日本心臓血管外科学会、日本輸血・細胞治療学会、日本医学放射線学会から各専門家を招き、本学会の産婦人科医とのジョイントシンポジウムにおいて、「帝王切開手術中の肺血栓塞栓症」および「正常分娩直後の不全子宮破裂・ショック」の2つを企画しています。若手産婦人科医のモチベーションを高める「こんなときどうする？」という実際の症例提示から始まり、診断、治療、管理についてそれぞれの分野からアドバイスをいただき、実地臨床に役立つシンポジウムになることを期待しています。新生児サイドからは、輸血供給に対する諸問題の特別講演をはじめ、興味深いテーマによるワークショップを企画しております。また、近年問題となっている「女性ホルモン剤と血栓症」に関する理事長講演も企画しています。

これからの本学会は若手医師の躍進が期待されます。多くの若手医師が学会会員となり、本学会を盛り立てていただきたいと思います。

平成 26 年 9 月